
けいおん×マギカ

彼方コナタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん×マガカ

【Nコード】

N7260X

【作者名】

彼方コナタ

【あらすじ】

私立桜が丘高校に入学してきた中野梓は軽音楽部に入部する。憧れと期待、そして不安を抱えた彼女が入部したそこは自分の思いからかけ離れた活動をしていた。お茶を飲んで、おしゃべり 練習はほとんどしない。そんな現状を良しとしない梓は、ある日奇妙な生物に出会う。生物の名はキュウベえ。梓を魔法少女にするために来た使者だった。

ブローグ／魔法少女ってなんですか？

「あれ、誰もいない……？」

一日の授業が終わって音楽準備室を訪ねると、いつもならいる先輩方の姿が無かった。

朝練習のときに遅れるという話は聞かなかったし、急な用事でも出来たのだろう。

私はそう結論付けて、むったん（エレキギター）の入ったケースを壁に立てかけて教科書が入ったカバンをその横へと置いて、ソファに座る。

入部してから今日で一週間。

そろそろ部の雰囲気にも慣れてきていい頃合いだけど、あのグダグダなお茶の時間だけは許せなくて、ついつい怒ってしまい、結果的に先輩方との距離が離れているように感じる。

……こんなはずじゃなかったのになあ。

新歓ライブで先輩方の演奏を聞いたときに得た感動。心が弾み、自分もあの音の中に混ざりたいという気持ちが薄れてしまっていくのが自分でわかる。

今ではどうしてあんな感動を覚えたのか疑問で、自分がこの部に入った動機さえ信じられなくなっている。

だから、今日こそは頑張ろう。

何を？ と聞かれても答えられないけど、ただ精一杯やりたいという想いがある。

とりあえずは、練習を始めるところから。

お茶の時間も大切だっというのは判っている。先輩方がそれを糧にして頑張っているのもこの目で確認したし、私だって甘いものは好きだ。特にたい焼き。

「ああ、ムギ先輩また用意してくれないかな」

思わず、その声に出ってしまった。

慌てて口を両手で隠すように塞いで周囲を見渡す。

当然、誰もいないし聞いていない。

私は安堵して、うな垂れた。

……毒されている。

先輩方に付き合っている間に私も部の雰囲気にも馴染んでしまったようだ。

クラスメイトである憂に私が変わってしまう事を相談したことがある。その回答は「肩の力が抜けるっていいことだよ」とのことだった。

確かにその通りなんだけど、肩の力も抜きすぎるとこんなにやくみに芯がないだらーとした駄目人間になってしまう。

ここにいる先輩方がそうだと言っているわけじゃないけど、たぶんこのまま何もしていないとそうなってしまっただろうなと思った。

だから、私は自分に活を入れようとして気付く。

「練習しなきゃ」

なんでソファに座ってまったりしてるんだろう。これこそ毒されてしまった証拠だ。先輩方が来たときにこんな姿を見せれば、確実に「お茶にしましょう」と言われるに違いない。

それだけは避けなければ！

立ち上がり、壁に立てかけたケースを手取る。

いや、手取るうとしたところで奇妙なものを見て立ち止まる。

「……なにあれ」

先輩方とお茶をするときに使用する四つの学校机を集めて作ったテーブルの上に白くてふわふわしてそうなぬいぐるみがあった。

先輩の中の一人 たぶん唯先輩が持ってきて置いていったものだろう。私物の持込は最低限にして漫先輩も注意していたのに……。

私はぬいぐるみを手にとって抱きしめる。

予想通りふかふかだった。

尻尾みたいな部分が妙に気持ちいい。それに何か生きているみたいに温かった。

「誰のだろう？」

抱き心地がとても良い。一緒に寝たら安眠間違い無しだ。欲しくなる。でも、これはたぶん誰かのもの。

どこで買ったのか聞いてみようか、そう思ったときだった。

「あまり強くされると痛いよ、中野梓」

「え……？」

ぬいぐるみの赤くて丸い瞳が私を見ている。

一瞬、喋ったように聞こえたのだけど……気のせい？

いや、

「だからもう少し優しくして欲しいんだ、梓。聞こえているかい？」
喋ってる。

これ、喋ってるよ！

なんで？ ぬいぐるみの中には押すと鳴いたり録音してあるボイスを発するものがあるけれど、この子は私の名前を呼んだ。ということは、唯先輩が予め登録しておいたボイスだったってこと？ ありえる。私を驚かせようと昼休みにここに置いていったんだ。

「なんだそういう機能なんだ」

私はそう納得して、ぬいぐるみの頭を撫でる。

と、ボイスが再生される。

「……認めないんだね、中野梓」

あまり可愛くないボイスだけど、そこは唯先輩のセンスだからかな？

ただ感触は最高なので、手放す気にはなれない。

そうして、私がいばらくぬいぐるみのふかふかを堪能していると、

「よーす、梓来てるかー？」

先輩方がやってきた。

「っあ！ あずにゃん、その子?!」

音楽準備室に入ってくるなり私に駆け寄ってくる平沢唯先輩。先

輩の髪は茶色で、天然パーマらしく毛先が跳ねている。前髪に刺してある黄色い髪留めが特徴だ。また、顔はくりくりとした瞳が小動物を思わせて愛くるしくて、なにより頬つぺたが柔らかいのだ。

触感で言えばこのぬいぐるみと勝るとも劣らずといったところ。

「ちよつと感触が良くて抱いちゃってました、唯先輩のですか？」

目の前にやってきた唯先輩にそう尋ねる。

しかし、答えたのは唯先輩じゃなくて。

「ボクは唯の所有物ではないよ。そろそろ離してくれるとありがたいのだけど？」

ぬいぐるみだった。

こんなボイスまで用意されているなんて驚きだ。

「すごいですね、このぬいぐるみ。現代科学の進化を感じます」

「いや、えと……あずにゃん、それはね……」

「唯、君からも頼むよ。この子現実を見てくれないんだ。ボクがずっと話しかけているのに応じてもくれない。失礼な人だよ、まったくと……」

唯先輩が口をパクパクさせて、両手の指を組んだり離したりしている。何か私に言いたい事があるのだろうか？ ならばつきりと言ってくればいいのに。

「どうかしたんですか、唯先輩」

唯先輩は少し悩んでから告げる。

「それ、本物なの」

「本物？」

「うん、生き物ってことだよ」

「生物？」

「そう、なまものなの」

「私こんな生き物みたことないですよ？ 騙されませんかから」

「えっと、それはね……」

唯先輩が説明しようとして口を開いたとき、他の先輩方がこちらへやってくる。

「なに話してるんだ……ってキュウベえじゃないか」

「ほんとだ、キュウベえがなんでここにいるんだよ」

「まあ、キュウベえもお茶をしに来たの？」

「漣先輩、律先輩、ムギ先輩はそれぞれ声をあげた。

みなさんこの生物？を知っているようだ。

よく状況が判らないが、一つだけ把握できた。

それはこの子がキュウベえという名前らしいということ。

「この子、キュウベえって生き物なんですか？」

「そうだよ、私たち魔法少女の使い魔的ポジションのキャラクター
さ」

「律先輩はそう言った。」

「……魔法少女？」

「なにそのメルヘンな存在。というか私たちってどういうことだろ。」

「うん、あずにゃんにはまだ言っただけだったね。私たち全員魔法少女なんだ」

「……意味わからないです」

「とうとう唯先輩は変な電波を受信できるようになってしまったの
だろうか。けど、他の先輩方もそうだし……どういうこと？」

「私は抱いたためいぐるみ キュウベえに視線を向ける。」

「理解したかい、中野梓。ボクは君にお願いがあつて来たんだ」

「お願い？」

「そう、ボクと契約して魔法少女になってほしいんだ」

「その言葉に周囲の先輩方は騒ぐ。」

「おお、中野も魔法少女に選ばれたか！」

「……よく考えてから決めた方がいいぞ」

「お茶にしてゆっくり考えましょう？」

「なんだろう。私の知らないところで勝手に話が進んで言ってるよ
うな気がする。」

「魔法少女ってなに？」

「契約って？」

私はそれぞれの席に着いてお茶とお菓子を待つ先輩方に問いかける。

「えと、魔法少女ってなんですか？」

ブローグ／魔法少女ってなんですか？（後書き）

初めまして&こんにちは、彼方こなたです。

この度はこのような駄文を読んで頂きありがとうございます。
誤字脱字、技術指南、その他感想など頂ければ幸いです。

第一話 / そんなの、絶対だめ

魔法少女とは奇跡と引き換えにキュウベえと契約を結び、魔女と戦う運命を課せられた存在……らしい。

音楽準備室の一角。いつものようにお茶会を行う面々。ただ一つ普段と違うことをあげるなら、テーブルの上にはお菓子とお茶以外のものがあること。

それは話にあがったキュウベえという謎生物。

私は先輩方が口にする『魔法少女』と『キュウベえ』がどういったものなのか尋ねたところ、返ってきた言葉は御伽噺のような設定だった。

「つまり、私たちは奇跡を対価に魔法少女になったんだよ」

律先輩は語る。

「願い事をなんでも一つ叶えてもらった代わりに、このキュウベえって生き物の手伝いをしている。ただそれだけのこと」

いつもふざけているのにこういう風にすっかり説明されると、ギヤップもあつて先輩の好感度がちよつとあがった気がする。

ちよつとただけだけだ。

「ねえ、あずにゃんは何をお願いするの？」

「……特に決めてません。それにまだ私信じていないですから、魔法少女とか魔女とか」

「梓は頑固だなー。順応しなきゃやっていけないぞ」

「律先輩のは大雑把って言うんですよ」

「つく、言うじゃないか！」

「けど、事実だな」

「なっ！？ 溇まで納得するのかよ……ひでえ。私たち長い付き合いじゃないかよー。もっとフォローがあつて然るべきじゃないか」

「じゃあ、もう試験勉強で泣きついてくるなよ。順応するなら自分でしっかりとして学生の本分を全うしないとな」

「……う、痛いところを」

「律はツッコミどころ満載なんだよ。その前だって」
「溇先輩はお説教モードに移行。律先輩は頬を膨らませてそれを聞いているのかいないのかわからない。」

「いつもどおりの軽音部。」

「ただ、やつぱり今日は一味違っていて。」

「ムギ、ボクの分のお茶を用意してくれないか？」

私の膝の上で寝そべっているキュウベえがそうおねだりをした。

「ええ、すぐ用意するわ」

「ボクは猫舌だから、出来るだけ冷めて渡してくれると助かるよ」

「うん、わかったわ」

溶け込んでる。

たぶん、私以上にこの雰囲気に対応してる。

ほんとうにこの生物は何者なのだろうか？

実は宇宙人で、地球侵略を目論んでいるとか。実はこの体は入れ物なだけで、魂の入れ替えが可能な不死身とか邪悪な設定を持ってそうには思えないけど、この堂々とした態度を見ると、ちよつとむつとした。

だって、私が先輩方との付き合いを色々悩んでいるのに、みなさんとすごい仲良くて　　言ってしまうば羨ましかった。

「どうぞ、キュウベえ。暑さ加減は梓ちゃんにふーふーして調節してもらって」

と、テーブルの上にコップを置くなり、笑顔でキラーパスをかましてくるムギ先輩。

天然なのか狙っているのか。

たぶん、この人の事だから前者に違いない。

「よっこいしょつと」

キュウベえが前足？をテーブルの端へとかけて立ち上がる。後ろ脚がぶるぶる震えているのが可愛い。

私はテーブルの上からキュウベえ用のコップを手にとって息を吹

きかける。

ふーふー。

これで少しは冷めたはず。

キュウベエの顔の前にコップを置いてあげる。

「……持ち上げてくれると助かるよ、梓」

要望の多い生物だなあ。

そう思いながらも、私はキュウベエの体を両手で優しくもって、コップの中にあるお茶を飲める位置まで持ち上げる。

「ナイスだよ、梓！」

キュウベエは舌をコップの中へ伸ばす。

ぺろぺろとコップ内のお茶を撫でるように舐め、その度に体が上下に揺れた。尻尾の先がちょうど私の二の腕にあたってこしょこしょとしてくすぐったさを覚える。

「……まだですか？」

「もうちよつと堪能したいね」

ぺろぺろは続く。そして、こしょこしょも続く。

やがて私はそのくすぐったさに耐え切れなくなって、「あっ」「手を離してしまった。」

すると、

「あびやあああああああ！」

キュウベエの頭（一部）がコップIN。少し冷ましたとはいえ、それなりの熱さが残るお茶にダイブした結果は言うまでも無い。

「あ、梓ちゃん！ 早くキュウベエを！」

そうムギ先輩に言われ、慌ててキュウベエを捕まえてコップから遠ざけるが、既に遅い。

顔はお茶で濡れて、若干焼けどしたように熱くなっていた。

「……君はボクを殺すきかい」

「じめんなさい」

謝罪する。

申し訳ない気持ちで一杯だ。

わざとじゃないとはいえ、動物虐待をしてしまった。

「大丈夫ですか……？」

「まあ、どうってことはないけれど、次からは気をつけてくれるかな」

ムギ先輩の膝上で顔をタオルで拭かれながらそう苦言を漏らすキユウベえ。

ちなみに他の先輩方の反応はというと。

「だから、律は……」

「うう、澁ちゃん許してよお」

澁先輩はまだ律先輩にお説教中。

唯先輩はあつたかな日差しのせいか、目を瞑って眠っているようだった。

自由すぎるよ。

やっぱり慣れない。というか、

「結局練習してない……」

このままじゃ、駄目だ。

先輩方のペースに飲まれてちゃいけない。私がやらなきゃ、何も始まらないんだ。

「どうしたんだい、梓。ボクに叶えて欲しい願いでも見つかったかい？」

そうキユウベえに言われ、思いつく。

練習を真面目にする部活にして欲しい。

そんな願いがもし叶うなら……？

このだらけた風景が、私の望んだ姿になるとしたら？

それはいいかもしれない。

けど、

「まずは自分の手でやってみないと」

そう思う。

「君は頑固だね。彼女たちを見習ったらどうだい？」

「先輩方は考えなさすぎです」

「……それは一理あるね。けど、君はそれを自分の手でどうにかできるのかい？ 良ければボクが手を貸すこともできるけど……」
「結構です」

断言した。だって、これは私の願いだから。
他人に委ねたりはしない。

これは自分自身のもので、他人に与えてもらうものではないのだ。
「本当に頑固だね」

「……うるさいです」

「やれやれ、契約をとるのも大変だよ。もし、君が自分の手でその願いを成就できないと思ったときはいつでも頼って欲しい。どんな望みでもすぐに叶えてあげるよ」

「それには及ばないです」

「そうかい……じゃあ、ボクはお茶も頂いた事だし、帰らせてもらうよ」

そう言ってキュウベえは音楽準備室の窓から出て行った。

ここは校舎の四階にあるんだけど。その常識的な価値観は魔法少女の使いには適応されないようです。

後日、私はいつもどおり音楽準備室でだらけている先輩方にこう言った。

「本気で練習しましょう！」

お茶会をしてだべって終了の部活なんて同好会以下だ。

目的があるならそれに向かって全力で取り組むべきなんです！

だから、私は言う。

「このままじゃ、駄目です！ もっと、みんな頑張らないと、うまくならないです！」

別に先輩方の演奏が下手だと言っているわけじゃない。ただ、現状維持が許される腕でないのは確かなのだ。

澁先輩は私のその意見に同意してくれて、

「そうだな、最近お茶飲んでばかりだったし、練習しつかりやらないとな」

「そう言ってくれた。」

「けど、他の人たちは……。」

「えー、めんどくさいよお」

「お茶してからでいいじゃんか」

「今日は梓ちゃんの好きなたい焼きよ？」

と、拒否あるいはこちらを誘惑しようとしてきた。

たい焼きは食べたい。私はつぶあん派だけど、クリームでもチー

ズでも問題なし。食べ方は、尻尾から頂く。

ああ、いいなたい焼き。

ちよつとくらしいの休憩ならいいかも。

そう誘惑に屈する寸前の私の前で、漣先輩は宣言する。

「今日は休憩なしだ！ 勿体無いけど、たい焼きもなしで！ 律も唯も最近全然楽器いじってなかっただろ、食べてばかりじゃ体になまって動かなくなるぞ！」

「えー、漣ちゃんお母さんみたい」

「漣ママ怖いよー」

「……たい焼き美味しいのに、いらなの？」

ほんと、この人たちはやる気というものが感じられない。

『ボクと契約すれば、君の願いを叶えることは造作もないだろうさ』
キユウベエの言葉が脳裏をよぎる。

「そんなの、絶対だめ」

「どうした梓？」

「……あ、いえ……なんでもないです」

つい口にしてしまった。

「梓ちゃんもたい焼き食べましょう？」

「う……」

思わず漣先輩を見てしまった。

「どうする、梓？ 練習は食べてからにするか？」

「……はい、ちょっとだけゆっくりしてからにします
結局、こっぴごなつてしまつたのだつた。」

第二話 / 先輩

他のバンドを探そう。

私はそう決心した。

放課後、音楽準備室に寄らずに近所にあるライブハウスへ足を運ぶ。

既にライブは始まっていて、私はチケットを購入し中へ入る。

そこには大勢の人がいて、煌くステージの上で演奏するバンドの人たちがいた。

鳴り響くメロディ。ギター、ドラム、ベース、キーボード。そして、ボーカル。

ちょうど今演奏しているバンドは先輩方と同じ構成だった。

唯先輩よりのギターよりも、律先輩のドラムよりも、漣先輩のベースと同じくらい、ムギ先輩のキーボード以上に　うまい。

ボーカルも耳朶の奥まで澄んだ声届いてきて、音に圧倒される。

私の求めていた音だ。

でも、周囲の人たちのように私はその音に酔えなかった。

代わりに涙が出ていた。

視界が霞む。

どうして自分は泣いているのだろう。他人事のようにそう思う。

横にいた露出度の高いお姉さんが「大丈夫？」と優しく声をかけてくれる。私は「大丈夫です」と涙を手で拭い、注目を浴びる前に

出ることにした。

外は、雨が降っていた。

むったんの入ったギターケースに専用のカップを装着。私用の雨具はないので、濡れて帰るしかない。

急ごう。

そう思っても、足はとるとろとしか動かない。

体が重い。

雨で額に張り付いた前髪が気持ち悪い。
制服もすっかり水を吸ってしまって肌に張り付き、透けてしまっ
ている。

傘を差した同じ学校の生徒二人組みが反対側の歩行者でふざけあ
っている。

楽しそう。

口では馬鹿にし合ってるけど、それが本気じゃないのは傍から見
ていてもわかる。

心と心が通じ合っているから出来る罵倒のし合い。

お互いが信頼できるから、心に踏み込んでいける。

……ああ、そうか。

気付く。

「私は先輩たちとああしたかったんだ」

涙の理由。

他のバンドを見て、そこに入りたいという感想を抱かずに、比較
してしまったのは……私が求めていた音だったのに心が躍らな
かったのは、私の中でメンバーが既に決まっていたからなんだ。

技術的な音なんかじゃない。

あの新歓ライブで聞いた先輩方の音にはあったんだ。

私が本当に求めるものが。

「戻ろう」

そして、誤ろう。

今日さぼってしまったことを。

私は学校に足を向けた　その途端、

「え」

足元にあったアスファルトが消失した。

気が付くと、私は奇妙な教会の前に立っていた。

奇妙というのはその教会の色がピンクで、まるで陽炎のように揺

れていたから。

何かわからない。怖い。

周囲を見渡しても、他に建築物はない。それどころか空は赤いし、教会を囲うようにして木々が生えている。

森の中なのかもしれないと思った。

「どうしよう」

森の中に入るのは嫌だし、かといってこの教会に入るのもためらう。

夢なら覚めて欲しい。

そう祈ると、

ぎい。

音を立て、教会の扉が開いた。

そして、扉の向こうから出てくるものがあつた。

骸骨だ。

人の形をして、手には本を持っている。

骸骨は私の方へ近づいてきた。

……逃げなきゃ。

でも、足が動かない。

ぺたん。

その場で尻餅をついてしまった。

立って、立たないと。

ケタケタケタ。

骸骨の口が動き、歯と歯がこすれ合う音が響く。

怖い、怖い、怖い、怖い……怖い！

体が震えて動かない。

血の気がひいて、寒気がする。

ケタケタケタケタケタケタケタ。

もう骸骨との距離は ない。

空いた手が私の肩を掴もうと伸びてくる。

「っやだ」

私は目を瞑った。

と、

「下がれ、梓！」

閃光を睨越しに感じた。

恐々と目を開く。

骸骨はいなくなっていた。

代わりに、

「無事か？ 梓」

青いドレスを纏った澪先輩がいた。

第三話 / ありがとうごさいます

「澪……先輩？」

地に尻餅をついたままの私の目前に立っているのは紛れもなく澪先輩……だと思う。はっきりと断言できないのはその姿が普段とかけ離れていたから。

澪先輩は制服ではなく、青いドレス。それもフリフリとしたものではなく、動きやすそうな戦うことを意識したような作りの衣装を纏っていた。

魔法少女。

不意にその一語が浮かんだ。

「無事か？」

澪先輩に手を差し伸べられ、ハツとする。

……私、助かったの？

「せ、先輩……私」

震える。

命の危機にあつたことを思い出す。

「もう大丈夫だよ、あずにゃん」

背中に暖かな重みが加わった。

背後から手が伸びてきて私の頭が抱えられる。

見えないけどわかる。唯先輩だ。

「間に合っただみただな」

「よかつたわ。本当に」

律先輩とムギ先輩も登場。二人とも澪先輩と同じような衣装を纏っていた。

律先輩は赤で、ムギ先輩は黄色。

魔法少女の戦闘服……でいいのだろうか。

「じゃあ、私は教会の中にいる魔女を倒してくるよ」

私の頭が理解に追いつくより先に先輩方は話を進めていく。

ただもう恐怖はなかった。

唯先輩がぎゅっとしてくれることで、落ち着けた。

「あたしも付いてくよ」

「一人で平気だ」

「いいじゃん、溲って時々へまするし、一緒のが楽だろー」

「……わかったよ。唯たちは梓をつれて結界を離脱してくれ」

溲先輩と律先輩が教会の中に入っていく。

「あ、待ってっ」

私はその二人の背に声をかけていた。が、届かなかった。二人は教会の空いたままの扉から中へと姿を消した。

「どうしたの、あずにゃん？」

「言い忘れてたんです……ありがとうございますを」

そう、忘れていた。

溲先輩に、律先輩に助けて頂いた礼をするのを。

「じゃあ二人が戻ってきたら言わなきゃね」

「……はい」

唯先輩の言葉に頷いて気付く。

そうだ、私……今日。

「ごめんなさい」

誤らなければいけなかった。

止まっただけの涙がまた出てきてしまった。

「え、ど……どうしたの？ どっかやられちゃった!？」

「梓ちゃん、大丈夫!？」

唯先輩とムギ先輩が突然泣き出した私に驚く。

本当なら責められてもおかしくないのに、二人は私の心配をしてくれている。そう思うとより悲しくなり、涙が止まらなくなった。

「わ、私……今日、部活……行かなくて……ごめんなさい」

「いいよ」

ぎゅっ。唯先輩が優しく、けれど強く私を抱いた。

あつたかくてやわらかい。

「梓ちゃん」

ムギ先輩が私を呼んだ。

その声はいつも以上に穏やかだった。

「はい、どうぞ」

ムギ先輩の手に握られたたい焼き。

「これは？」

「今日のお菓子だったの。梓ちゃん好きだと思って、どうぞ」

「……ありがとうございます」

「ここは危険だから、出ましょう」

「はい」

私は唯先輩とムギ先輩に案内されるまま、結界？を出た。

その後、私たちは澗先輩たちが戻るのが待っていた。

感謝を、謝罪を私はまだしていないから。

でも、いくら経っても二人は帰ってこなかった。

第三話／ありがとうございます(後書き)

読んで頂きありがとうございます。

ここから物語はダークサイドへ移行。

次回は語り部を変更する予定です。お楽しみに！

また感想、指摘など頂ければ幸いです。

第四話 / 魔女

「あ、待ってっ」

教会内へと足を踏み入れ、その扉が自動的に閉まると同時に梓の声が背後で聞こえた……気がした。

戻ろうか、そう足を止めた私へ先を行く律が、

「どうした？ 漣」

怪訝そうな顔で振り返る。

「梓の声が聞こえなかったか？」

「？ んや、聞こえなかったけど」

「そうか……」

やはり気のせいだろうか。

私は閉ざされた扉を伺う。

力づくで開けられない事はない。ただ戻れば魔女を取り逃がしてしまう可能性がある。魔法少女としての責務もそうだが、私は犠牲者など見たくない。梓は唯とムギが見てくれているし、大丈夫。早く終わらせて戻ればいい。そう結論を出した。

「いいや、行こう」

「オツケ。じゃあ、さっさと倒そうぜ」

律と二人で奥へと足を進める。

外観も異様な教会であったが、その内装はそれ以上であった。

祭奥、ステンドグラス前に置かれたマリア像から放射線に広がる木々。天井まで達しているそれらは生を訴えるかのようにうごめいている。

？ ざわ、ざわ ？

まるで心臓の鼓動のように波打つ音に、どうしようもなく私の心が揺すられる。

けど、大丈夫。

横を見れば、律がいる。

「魔女見当たらないな」

「ああ、でも気配はするんだ」

自分の着ているドレスの腹部にあるソウルジェムからはここに魔女がいると伝わってくる。それは律も一緒に、律は自分の胸元にあるソウルジェムを片腕で押さえ確認している。

どこ？

二人でマリア像の前に立ち、周囲を詮索。木々で視界が悪い。きつとどこかに隠れている。ステンドグラスから漏れる光を頼りに目を凝らす。

「律、」

不安になって意図せず、名を呼んでいた。

「……」

「……律？」

返事がないことに違和感を感じて視線を横へと移動させると、

「ッ　！？！！」

視界の隅に見えた光の軌跡に思わず飛び退いた。咄嗟の判断

いや、判断する間もなく今までの経験から体が反射的に動いてくれたことが幸運だった。

でなければ……、

「律……どうして」

私は今頃、律の手にしている大槍に体を両断されていたことだろう。

「み、お　」

ゆらり、体を揺らして一歩前に踏み出す律。

律の体には黒い霧が纏わりついている。おそらくそれが原因だ。

私は律の胸元にあるソウルジェムがまだ輝いていることを確認して、安堵する。

「魔女、それも憑依型か」

珍しくはある。でも、初めての相手ではない。

憑依型　実体はなく、人の体に乗っ取ることに特化した魔女。

強くはない。でも、厄介だ。

「う……あう、が」

律 いや、魔女が大槍を振るう。

間合いの取り方が甘い。横薙ぎの一撃を私は身を引くことで回避。さらに続けてきた返しの突きを、その矢じりを指と指の間で取ることで防ぐ。槍相手の白刃取りだ。

魔女戦は冷静に。

魔法少女になったばかりの頃なら気が動転する展開ではある。でも、今はむしろ、

「魔女がどこにいるってわかった方がやりやすくて、ありがたいよ」
空いた片手を掲げる。

私は、私の武器を出現させる。
剣。

私の頭上の中へと出現した十本の刃は、その切っ先を律に向けている。

……迷ったらだめだ。

友人を狙う行為に胸が痛みをあげた。

でも、躊躇いはしない。

「 躲して」

剣を放つ。まるで矢のように勢い良く殺到した十本の刃による雨を、魔女は槍を引き、その槍捌きで防いでいく。防げない可能性も考慮して、刃はどれも周囲の床を狙ったものだったが、いらぬ配慮だった。

ただ狙い通りにはいった。

床に突き刺さった刃。

私はそれらに命じる。

「括れ」

刃たちは一瞬にして鉄鎖となり、律の身を地に縛りつける。

これで魔女は動けない。

「さて、問題はここからだな」

魔女は宿った体が動けなくなることを知り、姿を現す。律の体の周囲を漂っていた黒い霧が形を作っていく。人型。顔の判別はつかない。長髪で、女性の肉体だ。

魔女の本体。

実体ではないため、物理攻撃の一切を受け付けない。が、私は魔法少女であり、その手にあるのは奇跡の対価によって得た異質の力。

両手に剣を出現させ、握る。

これを振るえば、一刀のもとに魔女を葬れるだろう。

だから、

「ツツアアア

！！」

そうした。

?ピシッ?

音が響く。

ただ、それは魔女を倒したことによる音ではなかった。

私の刃はまだ魔女に達していない。

私はゆっくりと自分の腹部を見た。

……ソウルジェムに亀裂が入っている。

「え?」

どうして、そう疑問を抱いたと同時、私のソウルジェムは破砕した。

世界が暗転する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7260x/>

けいおん×マギカ

2011年11月4日11時01分発行